

ら、あそこでどんな人に会ったか顔はしっかり憶えていなくても、必ず記憶に残りますよね。だから見られたほうも見られたって気がするのですよね。清永先生が言っていたのは、町内であったら必ず挨拶するっていう習慣を皆でつけると。知らない人は挨拶されると、泥棒だともうここは入りたくないと思うらしいですね。

西山 かつて欧米の社会っていうのは、異質な人にはもう説いてもしょうがないと。だから自己防衛するしかないというのでゾーニングが発達してきて、それ以外の人と離れていったわけでしょ。もう1つ他の人が入りにくいようなクルドサックを造って、ある心理的な領域をつくるっていうようなことをやったわけで。けれどもやはり犯罪は起こるわけね。だから犯罪というのは、人間の知恵と犯罪の程度とのいたちごっこだと思うのですね。だから結局のところ最後はおっしゃったような人的な、あるいは常識的かつ日常的な人間の対応能力、人間の相互の関係だというふうに思いますけどね。犯罪が起こるっていうのは1つの犯罪の背後にある社会の乱れとか、いろいろな能力の衰えを示していると考えるといいのではないですかね。

谷 そうですね。犯罪にしても災害にしても起こるのはしかたないと。いかに起こる確率を減らすのかと、被害を少なくするかというふうにしなないと、これは起こさないようにするにはどうしたらという風に考えたら破綻しますよね。

西山 一般論はそれでいいのだけでも、もう1つは特に地震なんかの場合はその2つの区分けの真ん中の初動機の緊急対応能力がかなり大事なのです。

谷 そうですね。私も聞いたことがあるのですが、地震が起こったらまず何をするか。火を止めるというのは皆、言うのですが、ドアを開けるとか窓を開けるといふ人は少ないのです。家が傾いてくると、逃げたくても逃げられないというように開かなくなるらしいのです。特に最近の家は、気密性が高いですからちょっと歪むと、全然開かなくなるらしいのですよ。昔の家と違って簡単に破れないし、昔だったら廊下のガラス戸なんてバーンと石でも投げれば開きましたけどね。

西山 今のマンションというのはそういう特に剛性の強いというか、地震の後に徐々に全体の構造が変わる時でも対応能力があるようなそういうものでありますよね。それから車でもそうですね。非常に剛性が高くて気密性が高くて遮音性が高いから、中でハンマーを持ってないと駄目だとかね。

谷 私、積んでいますよ。ちゃんと。(笑)

西山 ああ、そう(笑)。それがないためにそれが即、死に結びつくっておおいにありますよ。

谷 火が出たら逃げなければ死んでしまいますもん。

西山 今まで我々が居住環境なんかでも、スラムの時代に衛生状態が悪くから環境が悪かったが、お金ができてくると、経済的豊かさにふさわしい快適な空間がほしいというので、近代都市計画はアメニティという概念をだしてきたわけでしょ。ところが最近の欧米では、アメニティなんてレベルはないよね。いい住宅っていうのは防犯性能、防災性能とかそういう安全で、快適性+安全というトータルでその空間のよさを示すようなことになっていますよね。

谷 そういう意味では最近の自治体の安全、安心って本当に嫌なのです。安全、安心っていう言葉だけあって、実際のところは何かっていうとバリアフリーだとか。バリアフリーというのはあったほうがいいけども、それよりもっと命の危機をまず解決してからバリアフリーをいうべきなのに。

西山 バリアフリーで最近感じるのは、我々が歩いていても2cmぐらいのなだらかな差がね、今、右足つけるでしょ。それで、左足の高さが3cm違えば、もうこれで前のめりになるわけ。それから滑りやすさね。これはバリアフリーの中の安全に関わる非常に大事な事なの。それで最近一番ひどい目にあったのは、側溝の上にメッシュ型の雨を中に落すあれ。

谷 グレージングですね。

西山 グレージングはものすごく滑りやすいの。雨の日に坂道にあるとね、意識しないとステーンと転ぶの。僕は京都の竜安寺で転んで、左腕をものすごく強打しましたよ。だから来年あたりバリアフリーもいいのだけど、町の滑りやすさや段差の問題だけをですね、そういうの調べてみようかな。

谷 そのバリアフリーで、歩道と車道の段差をなくしたことによって、何が起きているかは、自転車が車道から歩道にピューと上がったり下がったりしているから、逆効果でかえって危険になっているわけです。

西山 自転車は本来、車道のほうを走るべきなのですよ。

谷 そうですよ。だからあれは歩道にいったんのせたことが誤りなのですよ。実際免許ないですし、講習も受けてないので彼らに聞くと走れるところがあるというだけなのに何処でも走っていいと思っているのですよ。しかもバリアフリーで入れるようになってきているわけですよ。

西山 1年の間に、2、3回ぶつけられて、あるいは危険を感じて「こら一、止まれ！」っていうのがありますね。

谷 失礼なのは後ろからきてチリンチリン鳴らすでしょ。退かないのですけどね、私。(笑)

西山 僕は自転車大好きで、30代は10年間、大学に通うのに毎日12、13km。自転車で毎日往復していたの。ハーフパンツで雨の日が一番気持ちいいのよ。何でやめたかっていうと、40歳の時にパンツが急に止まって、左ドアが開いて自転車でぶつかって、それで両膝を強打したの。誰かに言ったら40歳にもなって走っているからだと。

谷 ドアは怖いですね。私もバイクに乗るのですけど、ドア開くか開かないかにはものすごく気を使いますよ。止まっている車が急にドアを開けたらもうぶつかるしかないですからね。

西山 2000年の12月だから阪神が起こって5年目に書いた本ですけど、阪神の時に本はほとんどできて出る状態だったのだけど、阪神で全く想定しない事態が起こったから、阪神に対してどのように危機を考えていったらいいのか書かなければいけないと。結局、日本の市街地が基盤整備をやって、基盤整備が進んだところで災害が起こった場合は比較的災害は少ないのだけでも、基盤整備を集中的にやればいいのかというふうにならなかったわけ。とにかく、住宅の倒壊で人が死んで、基盤復興から住宅復興へ明らかに阪神というのは日本の市街地の都市政策の転換というか、基盤復興をやらなければならないところがいっぱいあるわけだけど、それだけでは駄目で、住宅復興という新たな対策をきちんとしなければいけないということが非常に分かったわけですね。僕の研究の中で研究は当たらない方がいいのだけど、実に見事に社会のニーズに応えているのがこれだよ。この研究をやり始めた一番の動機は、日本の区画整理で、建設省の連中というのは、今最先端のハイテク技術を導入して、途上国の人も日本のハイテク技術を輸入していることを誇りに思っているけれども、今、日本のハイテク技術の背景は生活の豊かさでしょ。そんなことを議論したって途上国は非常に貧しいわけですよ。定着するわけなくて、よく考えてみると日本だって関東大震災の戦災復興で区画整理を一番大々的に復旧したし。途上国の貧しいイスラムの状況とね、1923年9月10日の関東大震災とか1945年の4月初め頃とかね。そういう荒廃した原野の被災地の状況とスラムと非常に似ているわけですよ。今の途上国に一番役立つのは平時の技術ではなく、日本が貧しかった時代の非常時の区画整理が役に立つという発想から、非常時の区画整理技術というのはどうゆう考え方で成り立っているのか。そういう発想から始めたわけね。それで1日か2日だけ休みをとって、いろんな海外の調査に行った時に、コソコソ10年ぐらいためて、この本を書いたわけですよ。それで阪神の一連の経験で一番大事なことは、2つあると思うのですね。1つは災害というのは安全が侵されるという異常事態ですよ。我々の日常生活の中に普通の人がそんなものを考え得るわけないわけ。平日頃から日常生活の安全のことを8割は考えている。嘘ですよ。4割も嘘だと思うな。せいぜい数パーセントだけですよ。とすれば、そういう安全というのをきちんと意識しながら、世の中のことを考える人が必要になってくるのですね。これは組織のリーダーであり責任者の使命だし義務だと思うのですね。阪神で一連のものを見ていて一番感じているのは、リーダーが発揮すべきリーダーシップが発揮できなかったので天災を人災たらしめ、そしてさらに被害を人災化したというのを非常に痛感しましたね。

谷 あの時の首相は最悪でしたからね。

西山 普通の人から、組織の部長、課長、自治体、民間の上に危機の時は公の自治体、県、国という機関があるわけですよ。すると、国で1人の首相の見識というのは、ああいう非常事態、戦争の時に大切なわけですよ。僕は愕然としたのだけでも、村山さんなんていいお爺さんとみられていたわけだけど、非常時の指揮官たり得なかったわけですよ。だから阪神はきちんとした復興計画ができるわけがないと。そこで思い出したのが、ナポレオンの法則というのがあって、羊がライオンを率いているという組織があったと。非常に弱い指揮官で、非常に有能な兵力と兵器を持っている場合と、もうひとつは、ライオン一匹がリーダーで率いて、あとは弱小の羊がいると。それが戦うとどちらが勝つか。ナポレオンは明らかにライオンが率いている部隊が絶対勝つと。それだけ、安全や危機に対するリーダーシップの問題を非常に彼は深刻に説いたわけ。ナポレオンは自分がライオンだから絶対勝つと聞いたわけですね。あのおとき首相が一番酷かったから。自治体のほうでは兵庫県の海原さんという知事は非常に見識を持ってよくやったけど、最初

の数時間は彼も想定していなかったね。それから、危機の安全度の枠組が非常に弱くて、彼はいざという時、非常に使命感持ってやるわけ。想定していないことが起こった時の数時間の行動のほうが、さらに使命感あるリーダーシップを求められるわけ。通信システムがなかったから彼は家で待っていたわけですよ。例えば最近、プロのカメラマンというのはデジカメを使用する場合、非常に故障が多いから同じ物を3台持っていつている。僕はテープコーダー2台、カメラ2台を海外に持って行くの。その時の大法則が一番大事な録音をしている時にしばしば電池がなくなるってということと、一番大事な写真を撮らなければならない時に何か事故が起こって撮れなくなる。それからソニーの古いテープコーダー落としたら壊れることが多いの。それは非常に感じましたね。だから海原さんは全体としてはよくやったと思うのですよ。それから、神戸市に焼身自殺しましたけど小川助役っていう人がいて、この人はすごい使命感持ってやりましたよ。それから鶴木さんという都市計画局長も非常に立派でしたね。その小川さんとの思い出についていいますと、兵庫県の審議会で、議論が終わって、それで僕は早く帰ろうと思って、階段使って降りたらなぜか小川さんは僕がそういう行動をすると予知して、下で待っていてくれている。手を握って、よろしくご指導願いますと。そのくらい小川助役というのは気配りができる人で、その委員会の中で災害復興なんかについて研究者として研究しているのはこれほど大事なテーマで、これが日本の都市計画の宿命であるにも関わらず、研究者として災害復興を研究している人は阪神の前は誰もいなかった。皆、予防の方に行くわけ。何故ならば、予防というのはあらゆる自治体であらゆる災害に対して起こってないわけだから、予防しなさいというのは金がでるわけで。災害復興というのは事が起こらないと駄目なのだし、研究員じゃないけどおそらく1000万ももらわないでやっていると思う。だから、研究者のほうも想像力ないよ。そういう意味ではリーダーシップで、特に東大の先生で防災担当の先生は、これは後で消していいですけどね（笑）。シミュレーションやるのではなくて、いざというとき「俺のところに相談に来い」と。的確なネットワークを持って、首相に直に話し得ると。今我々の中で直に話せるのは伊藤（滋）さんしかないでしょ。後1,2年伊藤さん大丈夫と思うけど、今度東京で起こったら伊藤さんのところ電話する。他の仕事があってヨーロッパに行くことになったんだけど、阪神の時も伊藤さんに電話して、僕が必要になったり、事態が急変になったら24時間以内に帰って来れますから電話くださいと。それから2日に1回は帰りの航空チケットがどのような状況にあるかチェックしていましたよ。それから最悪の場合、一般の電話より、回線の公衆電話のほうが繋がりはいいですね。それとラジオは情報収集にはいいのと、小さなビニール袋。これは、人間は火が起こった場合に逃げるしかないけども、地下鉄の中に閉じ込められて火が起こると、一酸化炭素中毒になって一番悲惨になるよね。だけど20分くらい持つよね。防災研究者がそういうことをやっているののって聞いたなら誰もやっていないって。

谷 さきほど、平時から危機意識能力を持っている人はいないっていったけれども、防災グッズが阪神淡路の後飛ぶように売れたけれども、今ほとんど売れてないし、売り場すらなくなってきていますよね。

西山 あの阪神の後、防災研究者のみなさんが災害研究者になったけれど、今もうほとんどの人が逃げている。阪神で考えたポイントを言いますとね、まず災害というのは忘れたころにやって来る。やっばしよくできている。そして思いもよらない質や規模で起こるから大災害。大災害の時は慌てふためくのではなくて違う事態が発生したと考え、自分が予知できないことを嘆くのではなくて起こった事故を前提に、即座に今後のことを考え始める。それが常日頃からの研究者の研究者としての全能力で、生活者は生活者としての全能力、専門家は専門家としての全能力、使命感だと思うのですね。それと安全に常に気配りするエリートを育てるということですね。例えば東大教授のように権力も金も持っていて、能力のある人は常にそういう意識でやってほしいなと思うわけですよ。高山先生の素晴らしいことは、今回の話で電話すると全体をコントロールする能力が一番よかったし、高山さんの発言が一番迫力あったもの。ああいうときはみんなでやっているのですから前へ前へと進めるようなプラスの評価しかしないね。世の中どんな悲惨になっても高山さんが頼りにしていたり、これはと思った人がやっていることは許しますね。マイナスでも2割のマイナスなら8割の方を高山さんは絶対評価します。それは非常に学びましたね。1993年に僕が起こしたプロジェクトで関東大震災の70年シンポジウムをやった後、さすがに矢島さんと小沢一郎がしかけて、関東の自治体の連合協議会みたいなのを作って、研究会を1,2年やりましたけれど、そういうのは非常に必要だと思いますね。また、市民、行政、社会のリーダー、それから研究者の危機への対応能力のネットワークを作ってくれということですね。これは要するに、知っているのと知らないのと全く違うわけで、あいつ知っているからという事で情報がバツと流れたりするわけです。その場合、さきほど